書評・図書紹介

服部英二著

『地球倫理への旅路
―力の文明から命の文明へ―』

立木　教夫

本書は、二〇二〇年に出版された、服部英二先生の日米通算一五冊目の著作である。

私は、先生がＣＯＶＩＤ-19のパンデミックの最中に本書を執筆されたということを知り、ミシェル・セールの次の言葉を思い出した。

人類によって切り刻まれた自然は、今、人類に報復すべく、沈黙のうちに再結集し始めている。(43)

このゆえにこそ、私たちは今新しい自然の概念を定義しなければならない。

(注：ミシェル・セール、清水良衛・服部英二訳「自然契約への回帰」、ジェローム・バンデ編、服部英二・立木教夫監訳『地球との和解―人類と地球にはどんな未来があるのか―』麗澤大学出版会、二〇〇九年発行、212ページ。)

服部先生は、セールの言葉をどう受け止められたのだろうか。本書著述の目的は、「人類の文明史はなんであったのか」ということの「再検証」にあると記されている(291)。私は、先生が再検証を通して、人類の文明史の中にセールが指摘した不気味な状況を招来した原因を突き止め、それを乗り越えていく新たな認識を提示されていることを知った――それは、「新しいホリズム（全一観）」(33)とも、「新しい全一論」(282)とも呼ばれている、ホールネスの認識である(7)。

再検証はどのように行われたのだろうか。それは、自ら文明史の現場に赴き、そこに身を置き、多くの専門家たちと対話を重ね、根源に遡って調査・考察するという方法である。それゆえ、本書は、「フィールド哲学」とも、「フィールド文明学」ともいえる、特色を兼ね備えている。考察の範囲は、空間的には地球全体に及び、時間的には人類が起源し進化してきた七〇〇万年間に亙るが、議論の焦点は、人類史の二万分の一の時間帯に起きたことに合わされている(6)。

＊

本書の書名は、『地球倫理への旅路―力の文明から命の文明へ―』である。このタイトルを見た時に、私は、「地球倫理への旅路」を歩んだのはもちろん服部先生であると思ったが、本書を何度か読み返しているうちに、人類の文明もこの旅路にあったのだろうと思うようになった。文明の歩みは、伊東俊太郎先生の文明の発展仮説によれば、人類革命、農業革命、都市革命、精神革命、科学革命を経て、現在は環境革命の時代に突入したと捉えられる。環境革命の時代にあって、人類文明は地球倫理を必要とするようになった、つまり、人類文明は、地球倫理への旅路を歩んできたということも、本書のタイトルに込められているのではないかと思った。そのように考えると、副題の「力の文明から命の文明へ」は、科学革命を契機に「力の文明」と化し

た人類文明が、今や環境革命を契機として「命の文明」への旅路に就いたのだと理解できるであろう。

＊

目次により全体像を示すことにする。

はじめに
第1部　地球倫理への道―通底する価値を求めて
　第1章　科学と文化の対話―ユネスコの使命
　第2章　通底する価値を探る
　第3章　聖性と霊性の変遷―一神教と多神教
第2部　人類文明の多様性―「あわいの智」へ
　第4章　メシア思想と覇権主義
　第5章　キリスト教と仏教
　第6章　イスラーム文明との対話
　第7章　ルネサンスとは何か？
　第8章　あわいの智へ―オーギュスタン・ベルクの風土学が語るもの
第3部　アカデミア賞受賞記念講演
　結　章　「普遍」から「通底」へ―人類文明の危機と日本の役割
おわりに

章ごとに内容を補充しながら、全体を簡潔に概観してみよう。

「はじめに」では、ゼノンの「アキレスと亀」のパラドックスが取り上げられ、エレア派の二元論的理性、分別知に対する根源的疑問が提示されている（iii）。二元論的理性により、万有相関の全一性が切り崩され、生成や生命の居場所が失われていくことが予感される。

第1部「地球倫理への道」では、第1章「科学と文化の対話」・第2章「通底する価値を探る」で、著者のユネスコでの活動と地球倫理に至る経過が語られ、第3章「聖性と霊性の変遷」で、全一性の崩壊の歴史を神話から現代までたどり、「命の文明」への方向転換の必要性が示される。

第2部「人類文明の多様性」では、第4章「メシア思想と覇権主義」で、「救済」という隠れ蓑をまとった覇権主義（135）の歴史を描き出し、最後に、文明間の対話の可能性を切り拓く、フランシスコ教皇の「形容詞と話してはならない。真のコミュニケーションは主体となされる。すなわち一人の人間とだ。その人は不可知論者かもしれない。無神論者かもしれない。カトリックあるいはユダヤ教徒かもしれない。しかしそれらは形容詞にすぎない。私は一人の人間と話す」（139―140）という力強い言葉を紹介している。

第5章「キリスト教と仏教」では、比較文明学的考察を通して、両者の根本的な違いは、キリスト教における「超越者」の存在にあることが突き止められる。しかし、この超越者の問題も、プロセス神学の「神」を「生成する存在」と捉える見方によって乗り越えられ、両者の通底可能性が証明されている（167―168）。

第6章「イスラーム文明との対話」では、「シルクロード総合調査」を通して実感した「文明史のひずみ」（174）、つまり、近代西欧文明はイスラーム文明の貢献を「無視」し続けてきたという事実を取り上げ、これが「イスラームの「恨（ハン）」」（190）を

生み、「文明間の対話」を困難にしていることを明らかにする。また、日本とイスラーム世界の対話の可能性も検討されている。神の捉え方における、「「現(うつ)し身」（表れ）である諸々の神仏を通して一者を透視する」という「日本の多神教」と、「一なる神が万物に顕現している」という意の「タウヒード（Tawhid）」は、一致することを示し、ここにも通底するものが存在することを証明している（192―193）。

第7章「ルネサンスとは何か？」では、ルネサンスが北イタリア中心に起こった理由を七点挙げ、比較文明学的手法で詳しく論証し、「欧米では決して語られなかった」（209）要因まで解明している。美術作品を比較しながら語られる、図像学的考察は圧巻である。

第8章「あわいの智へ」では、オーギュスタン・ベルクの風土学を取り上げ、主客対立の「西欧近代の古典的パラダイム（Modern Classical Western Paradigm = MCWP）」（256）を乗り越え、生成する自然の中に人間を捉え直す新たな智を考察する。主客対立を生み出した二元論的論理は、「間」を介して「通態化（Trajection）」（258）される。ベルクは、「実在は客体だけに、あるいは、主体だけに属しているのではない―両者の通態に属しており、通態的である」（注：オギュスタン・ベルク、立木教夫訳「自然は進化を考えているのか？」『地球システム・倫理学会会報』第一五号（二〇二〇年）、22ページ。）と述べている。

第3部「アカデミア賞受賞記念講演」は、「「普遍」から「通底」へ―人類文明の危機と日本の役割」と題し、若き日に恩師を通じて探究・体得した京都学派の知的伝統が、ユネスコという活動の場を得て、服部先生の中で独自の開花を遂げ、通底の価値の発見に至る様子が、コンパクトに語られている。

「おわりに」では、パンドラの箱の蓋が開けられ、ありとあらゆる災いが飛び出した後に、なお「希望」が残っていたという話（295）は、「はじめに」で予兆された危機状況にあっても、依然として、「希望」を語ることができることを示している。

＊

服部先生の「地球倫理への旅路」を、エピソードを交えながらたどってみよう。

この旅路は、先生がフランスに留学し、ソルボンヌでポール・リクール教授に提出した論文において、「AはAであると同時にnon Aである」（48）と「排中律」を超える論理の可能性を問題にしていたときには、すでに予感されていたと思われる。

しかし、先生が、この旅路に踏み出す契機は、「科学と精神文化の乖離こそが人類の生存にとっての最大の問題」（4）だと考えはじめていたときに、ミッシェル・ランドムが発した一言にあったのだと思う。

パリの石畳を歩きながら、そんな思いが絶えず心中に谺(こだま)する声となっていた私が出会ったのは、一つの言葉だった。それは私のこころを根底から揺さぶるものだった。

一九六〇年代のパリ、エトワール近くのとあるカフェテラスでのことだ。

三〇代はじめの私はミッシェル・ラン

ドムという知日家の作家ととりとめないおしゃべりをしていた。ところが話題が「伝統」という語に触れたそのとき、彼はこう言い放ったのだ。

「日本は伝統を維持している。西欧（オクシデント）は伝統と断絶した社会だ！」

私にとって、それは衝撃の言葉だった。（5）

服部先生は、ランドムの一言に触発されて、西欧の真の姿を求める探究を開始する。『聖書』の神話の読み解きから着手し、人類の文明史は、「まさしく蛇が予言したように、「知恵の樹の実を食すれば、汝は神の如くなるべし」という歴史であった」という結論を得ている（84）。さらに、比較文明学的考察により、「古典ギリシャ時代、北方から渡来したオリンポスの神々を信仰することにより、地中海文明（ミノア文明）の大地母神 Magna mater を葬り去るという母殺しの罪を犯し……科学革命によってキリスト教本来の父なる神も殺した」（52）という結論を得た。西欧は、「母殺し」と「父殺し」という「断絶」を経験していたのである。

西欧文明の真の姿は、多くの他の文明との出会いによって形成されたものであるにもかかわらず、近代の西欧は、他の影響を認めることを拒否して、今日に至っていたのである（279）。

一九七三年、ユネスコ本部で勤務を開始した服部先生は、「国際的知的協力こそがユネスコの使命」（9）と主張し、一九八〇年代に、「シルクロード：対話の道総合調査計画」を立案し、「文明間の対話」という新しい概念を提唱し、世界に呼びかけた（278）。このキーワードは二〇〇〇人以上の学者を引きつけ、三〇以上のシンポジウムやセミナーを生み出し（173）、さらに国連の「文明間の対話国際年」の指定にまでつながることになった（65）。

服部先生が立案した「科学と文化の対話シンポジウムシリーズ」は、過去三〇〇年間に変質した西欧がもたらした伝統文化と現代科学の間の「断絶」を、「対話」を通して修復することを目ざした、シンポジウムである。

第一回（一九八六年）の「ヴェニス・シンポジウム」では、「トランスディシプリナリー（領域横断的）」（23）、第二回（一九八九年）の「バンクーバー・シンポジウム」では、「人間と自然の調和」（27）、第三回（一九九二年）の「ベレン・シンポジウム」では、「人間と自然の全一性（Wholeness）」、「文化の多様性」、「女性の役割の重要性」（27）、第四回（一九九五年）の「東京・シンポジウム」では、「一七世紀に始まり、一九世紀にピークに達する機械論的科学主義が、三〇〇年にわたり、主・客を峻別し、自然を征服すべき客体と見なすことにより、盲目的な進歩の概念を生み出し、画一的な物質文明をつくり出した」（32）と指摘し、「二〇世紀の新しい科学は、量子物理学をはじめとし、宇宙にはかつて古代の知恵が抱いていた自然観に近い〈全一的秩序〉Wholeness が存在することを発見した」（32–33）との認識を明記した。この「新しいホリズム」（33）を、服部先生は「全は個に、個は全に遍照する」（34）と表現している。これにより、はじめて「「多様性の中の統一」という理念も理解される」（34）こととなったので

ある。

ユネスコを通して発信されたメッセージは、文明間の「断絶」の要因を明らかにし、次第に、世界の意識を変えていくことになった。

次に、「普遍」、「多様性」、「通底」、「あわいの智」という重要概念を通して、世界の意識が「西欧近代の古典的パラダイム」を脱していく様子を見ておくことにしよう。

＊

「普遍」

まず、文明間の「断絶」をもたらした要因を見てみたい。

服部先生は、西欧には「文明＝西欧文明」とする「文明一元論」が存在すると、指摘している（279）。つまり、西欧では、文明は西欧以外に存在しないと考えてきたのだから、文明間の対話などそもそもありえないということになる。この文明一元論の影響は、非西欧圏に属するわれわれの言語にも入り込んでいる、という指摘は衝撃的である。

一例として、「普遍」という概念を取り上げてみよう。

普遍Universalは、「uni＝一つに」と「verso＝向かう」からなる言葉である。この「一つとは、すでに設定された一つの価値であり、そこに収斂するものが普遍である」という。ここにある「すでに設定された一つの価値」とは、「理性的・男性的・西欧的概念」である。そのため、この見方は、「普遍が上位、特殊が下位」とする上下関係を生み出し、差別を生み出した。女性・子供は「理性を完全に使用できない」として差別され、植民地主義と相俟って、非西欧人は、「理性的存在になっていない野蛮人」として差別されるようになったのである（44、286–287）。

服部先生は、「「普遍」という言葉では人類の明るい未来は開けない」（45）と断言している。

「多様性」

ジャック＝イヴ・クストーは、一つの価値を目指すのではなく、文化の多様性こそ人類の生存にとって重要だということを示した。

多様性の重要性については、調査船カリプソ号を駆使して七つの海の海底の世界を万人に開示したクストーの言葉が決定的となった。地上と海の生態系の相互作用までも解明してきた、この『沈黙の世界』の作者は、こう述べたのだ。

「（南極のように）生物種の数が少ないところでは生態系は脆い。（赤道直下のように）種の数が多いところでは生態系が強い。」つまり生物多様性が減ずるほどにエコシステムが脆弱になることを発見したのであった。そして、全参加者に衝撃を与えたのが次の言葉である。

「この法則は文化にも当てはまる！」（34）

クストーの指摘は、「文化の多様性に関する世界宣言」の第一条に、「文化の多様性は、自然界に生物多様性が必要なのと等しく、人類にとって不可欠である」（35）と明記されることになった。さらにレヴィ＝ストロースは、「文化の多様性と生物多

様性は、単に類似しているのではなく、有機的に結ばれている」（285）と証言した。

ここに文化の多様性に関する新たな認識が確定した。

服部先生は、この新たな認識を人間存在論にも及ぼし、「自己とは多数の非自己によって活かされてここにいるもの」（69）と解釈した。

「通底」

「通底」とは「普遍」に対比される考え方であり、多様な文化間の懸け橋となり、文明間の対話を可能にするものである。

通底は、普遍とは異なり、まず他なるものの存在価値を認めることに始まる。異なるものを異なるままに尊び、しかもその底に響き合うものを認めることだ。（45）

「通底」transversalという考え方は、普遍とは逆に、すべての文化を対等に尊重する立場をとります。それは個人を扱うにあたって、一人ひとりの人間が、人種的・社会的・経済的・性的・年齢的な差異こそあれ、人間の尊厳においては等しいとする、基本的人権の理念にも呼応するものです。（286–287）

このように説明される通底の思想は、孔子により、すでに二五〇〇年も前に、「和して同ぜず」という言葉で説かれていた（45）。「「和」の概念とは、「異なるものの調和」であると同時に「和解に基づいた平和」を意味するものであり、「和して同ぜず」とは、「同化することなく調和すること」である（79）。

服部先生は、このような考え方は、「反理性主義」ではなく、「新しい理性主義」であり、「近代において軽視されてきた感性・霊性と響き合う理性、人間の全人性の恢復をめざすもの」と説明している（287）。

通底のアプローチを採ることで、「異なるものが、異なるままに、助け合い、補い合いながら、共に生きる道」（268）が可能となる。

「あわいの智」

通底のアプローチは、「あわい」に着目するオーギュスタン・ベルクの「風土学」（Mesology）により、哲学的基礎を与えられた。先に、第8章「あわいの智へ」の内容を取り上げたところで、主客が、「間」を介して「通態化（Trajection）」（258）される様子について述べたが、もう少し加えておくことにしよう。

風土学は、デカルトの主体と客体の二項離反という「根源的二元論」の呪縛を解く試みであり（257–258）、この主客の分断は風土学により根源的に回復されることが期待されている。服部先生の表現では、

古典的科学によって主客と二分されたものは、実は分かちがたく交流している。自然は客体ではない。生成する命なのだ。客体という幻想から解き放たれた自然は、私の一部だ。いや私は自然の一部なのだ。この意味で自然は主体性を持つ。また自然は考える、ともいえる。（261）

と述べられている。風土学の出現により、人類は、主客の「断絶」を乗り越える「新たな理性」を手にすることになった。ここに古典的科学で居場所を失った、生成、生命といったものが回復されてくるのである。

風土学では、論理も改訂される（259）。二元論的論理学の中核概念である「排中律」にかわって、「容中律」（服部先生の「包中律」と同じ）が採用されている（260）。

次に、主客の「断絶」を回復した、「あわいの智」の様相を見ておきたい。

絵画を例にとった、「あわいの光」の説明を見ておこう。

例えばゴッホのひまわり、アルルで描いた糸杉の発している光、その力のすさまじさだ。あれは一色では出てこない。また五色を混ぜ合わせても出てこない。それを混ぜ合わせたら灰色になるのみだ。彼のキャンバスには、いろいろな色がそれぞれ独立しながら、叩きつけたように併置されている。するとそのあわいから光が発する。異なる色がそのまま併置される時、「間」が光を発することを知った画家たちが印象派だったのだ。モネの睡蓮にも、スーラの点描画にも、ルノワールの少女像にもその「あわい」の光がある。（266―267）

まさに、異なる色が、異なるままに、助け合い、補い合いながら、光を発しているのである。これを服部先生は、「万有は結びついており、すべてがすべてと交信している。違いがそこにあってこそ、あわいは光を発する。これが万有相関の実相なのだ」（268）と述べ、「自己があるのは異なるものの存在のおかげなのだ。そこには他者への敬意がなくてはならない。そして他者への思いやりがなくてはならない。自己とは異なるすべてが、自己を生かしている、と知るべきだ」（268）と、あわいの光を手がかりに、自他や主客が連関した「万有相関の実相」を捉えて見せた。

＊

本書は、著者の長年に亙る知的探求の成果であり、取り上げられている話題は多様であるが、それらはまさに響き合い、相互連関的で全一的様相を呈している。ホログラムのように、どの章や項をとってみても、そのなかに本書全体に通じる意味を読み取ることができる。本稿では、それらの多様な話題の一部しか取り上げることができなかったが、例えば、「一神教誕生の原風景」（103―107）、「キリスト教と仏教の成立史」（141―157）、「遠近法の哲学的意味」（228―231）、「光背の出現」（231―243）等々のすぐれた論考があることを、指摘しておきたい。

本書は学術書でありながら、色彩豊かな詩的な文章で綴られており、すぐれた文学作品の特性も兼ね備えている。

今日の危機的状況下にあり、閉塞感にとらわれている人たちや、突破口を見いだせずにもがいている人たちには、是非一読を薦めたい。行動の指針を見出されることになるかもしれないからである。また、人類文明の未来の主役となる若者たちにも、読んでもらいたい。若い時に本書の知見に触れていれば、必ずや、これからの人生を歩む上で有益な指針を手にすることになると

思うからである。このように述べているうちに、本書は、あらゆる人に薦められるべきで、読者を特定する必要はないことに気づいた。著作自体に力があるので、手に取って読んでもらえば、読者は関心を引き出され、新たな世界の見方を知ることになるだろう。一人でも多くの方に、ぜひ、本書の一読をお勧めしたい。

〔北海道大学出版会、二〇二〇年〕